

# 若者へのメッセージ④

作家 椎名 誠

## 【第一回】川のように生きる

小、中学生の頃から、今でいうアウトドアの世界が好きで簡単なテントを持つては近くの海や川のそばで頻繁に野宿をしていた。大人になるとそれが高じて、日本だけではなく外国へとその行動範囲も広がり、そんな中で出会ったNさんに、生きていく哲学を学んだ気がした。

### アウトドアの世界で

学問をきわめる、というような崇高な経緯とはほど遠い道を進んできたので「人生の師」というような御方を尋ねられてもすぐに思い浮かべることはできない。

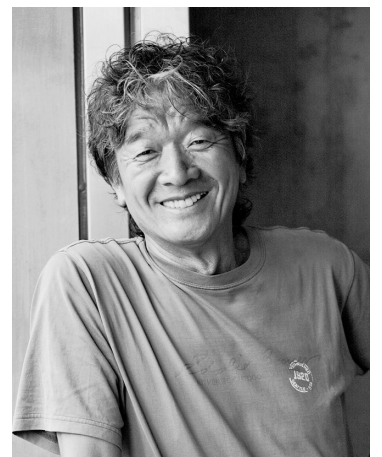
その対極にある場での素晴らしい師なら何人か思い浮かんでくる。

対極の場——って何だ？ と言われるとやや困るのだが、気取っていてもしょうがないからありのまま申し述べると、簡単なはなし「遊び」

の世界である。

遊び、といってもパチンコとかボウリングなどといったモロに遊興的な話ではなく、ここではアウトドアの世界、というふうに解釈していただきたい。

ぼくは小、中学生の頃から、今でいうアウトドアの世界が好きで、さしたる目的もなく一人でも友人らとともに野宿などを頻繁にしていた。まだアウトドアブームの来るか前だったから、世間的には変わって見られていた。思えば危険な少年時代を過ごしていたのだった。



椎名 誠 (しいな・まこと)

作家、写真家、エッセイスト。  
1944年、東京都生まれ。79年より、小説、エッセイ、ルポなどの作家活動に入る。

これまでの主な作品は、『犬の系譜』（講談社・吉川英治文学新人賞）、『岳物語』（集英社）、『アド・バード』（集英社・日本SF大賞）、『中国の鳥人』（新潮社）、『黄金時代』（文藝春秋）など。最新刊は、『そらとうみとぐうちゃんときみたちのぼうけん』（光村図書出版）、『漂流者は何を食べていたか』（新潮社）、『南の風に誘われて』（新日本出版社）。

近著は、『幕張少年マサイ族』（東京新聞、『階層樹海』（文藝春秋）、『こんな写真を撮ってきた』（新日本出版社）。  
旅の本も多く、モンゴルやバタゴニア、シベリアなどへの探検、冒険ものなどを書いている。

また、映画『白い馬』では、日本映画批評家大賞最優秀監督賞ほかを受賞。  
趣味は焚き火キャンプ、どこか遠くへ行くこと。

公式インターネットミュージアム

「椎名誠 旅する文学館」

<http://www.shina-tabi-bungakukan.com>

温暖な千葉県に暮らしていたので、簡単なテントを持って海のそばとか川のそばなどでの野宿である。当時、そんな小・中学生はあまりいなかったからしばしば警官がやってきた。当然だろう。でも警官が心配するようなことは何もなかった。よく補導されなかったなあ、と今になると思うのだけれど、ほくも警官も「時代」も大らかで温暖だったのだろう。

まあ、そういう子供時代を過ごしていたから、大人になると行動範囲は俄然<sup>がぜん</sup>広がる。簡単にいうと日本はもとより外国まであちこち行って、テントを持って移動し巨大な自然を堪能<sup>たんのう</sup>していた。サラリーマンでそうだったから、モノカキになって行動範囲が俄然<sup>がぜん</sup>広がると、野外旅のエリアもスケールも広がり、その期間も長くなった。

## Nさんとの出会い

そんな折りに外国で長く野外旅をしている大先輩と出会った。カメラであちこち行き、たいいてい二、三カ月の旅をしているNさんである。その人の体験は学ぶことが非常に多かった。

あるとき、Nさんはカヤックでカナダのユーコン川を三カ月ほどかけて下っていた。荷物を軽くするために例えば旅の記録用に持っていく筆記用具はボールペン一本だけで、替え芯を何

本か持っていく、という徹底ぶりだった。こういう方針は他のあらゆるコトにも貫かれ、すべての荷物を徹底して軽くしているのを見て感動した。人生を軽くして生きていく、という究極の指向にも繋<sup>つな</sup>がる、という哲学を学んだ気がした。

ほくも川のカヌー旅をしたくなり、弟子入りの教えが厳しいのだろうな、と覚悟していたら、川の上流でカヌーに乗ったほくに「さあ自由に下りなさい」と背中を押すだけだった。

川の流れに入ったら口による百万遍の注意はなんの役にもたらず、結局は自分の精神感覚とそれに連なる運動神経に頼るしかない、というのがNさんの教え方だった。

たしかにそうだった。予測もできないいろいろな川の流れにはそのつど偵察、判断、対応していくのが一番役に立つ訓練だった。

乗馬のときもそうだった。相手は生き物である。それぞれ別の「生」や「価値観」を過ごしてきたもの同士である。くわしく話し合いもできない。あとは互いの生き物の感覚でやりとりするしかない。

日本の乗馬クラブなどでは馬に乗ると、タズナは肩幅に持ち、視線は向こう三〜四メートルに。走らせるときは腹を靴の踵<sup>かかと</sup>で三回蹴って、

などという。そんなの国や馬の種類、性格によっていろいろだから、どれも人間が勝手に決めたものでしかない。カヌーも馬もシンプルになれど、相手側の思考が大切になるのだ、ということをも身をもって知った。

自動車のようにしくみが複雑、高度になればなるほど人間の勝手な「支配欲」が勝っていき、そのぶん間違った状態になると制御しきれなくなり、とてつもない暴走を処置できなくなっていく、という教えを知った。

Nさんからは生き方の基本もそれとなく教えられた。カヌーと同じでなるべく身軽に生きていくのが楽である、という。そのためには家など持たないほうがいい。下手<sup>へた</sup>に持つと、人生が家に縛られるようになる。

結婚だってそうだ。馬じゃないから別の人生を生きてきた人とずっと一生寄り添って生きられるかどうか分らないじゃないか、というのだ。Nさんは離婚している。なるほどなあ、と思った。でもそのときにはほくはすでに結婚しており、自分の家を持っていた。人生の「師」と出会うときはタイミングも大事だ、ということも教えられた。

川のように生きるのも大変だ。